

アイヌ語の存在型アスペクト「kor an」「wa an」の意味範疇について

吉川佳見

キーワード：アイヌ語、アスペクト、存在動詞、存在型アスペクト

1. はじめに

存在動詞が文法化してアスペクト形式になる現象は様々な言語にある。これを、金水(2006)に倣い本稿では「存在型アスペクト形式」と呼ぶ。アイヌ語は文法的テンスを持たず、アスペクト標識も義務的ではないが、アスペクト表現として扱われている形式が複数存在し、その使用条件については議論の対象となり続けてきた。中でも日本語でテイル (テアル) と訳される kor an や wa an については、中川(1981)、佐藤(2006)をはじめ複数の研究がなされている。この kor an、wa an は「接続助詞 kor/wa+存在動詞 an」¹ という構造であり、すなわちこれらは存在型アスペクト形式に該当する²。本稿では、kor an、wa an の意味機能を、存在という観点から分析する。このほか、存在動詞が構成要素となるアスペクト表現には hine an、kane an (いずれも「接続助詞+存在動詞 an」で、テイルと訳されることが多い) もあるが、これらについては稿を改めて述べることとし、今回は取り上げない。

本稿で扱う文献・資料は、沙流方言および千歳方言のものを中心とし、一部、他方言のものも参考にした。アイヌ語の表記は現在使用されている表記方法にあわせて改変したところがある。また、日本語の表記も現代仮名遣いに書き換えた。例文の日本語訳は原典通りとしたが、文脈理解のため、一部、必要に応じてカッコ書きで補足した。例文の下線は筆者が付した。

2. 動詞分類とアスペクト

2.1 状態性動詞と非状態性動詞

アスペクトという点から分類した場合、アイヌ語の動詞はまず「状態性動詞」と「非状態性動詞」とに二分される。(cf. 知里(1973[1942])、中川 1981)

中川(1981)によると、状態性動詞は、pirka 「良い」、poro 「大きい」等いわゆる日本語の形容詞にあたるものや、eraman 「わかる、知っている」、kor 「持つ、持っている」、an 「ある」、ne 「である」などの動詞であり、「単独で<静的な状態>を表わし得る (132p)」動詞である。非状態性動詞は、それを表し得ない動詞である。

¹ 存在動詞 an (単数形) が複数形 oka (または okay) をとり、kor oka(y)、wa oka(y) という形になることもあるが、本稿では kor an、wa an という形に代表させて説明する。

² 岡(2001)は、存在動詞を語彙的源泉としたアスペクト形式の一例として、アイヌ語の kor an、wa an があることに触れている。

状態性動詞は、その状態であることとその状態になることの二つの意味を持っている。たとえば an「ある、いる」は、「なる」という意味を表すことがある。また、形容詞的な動詞も同様に、たとえば poro「大きい」は「大きくなる」という意味になることがある。つまり、非限界的(atelic)、限界的(telic)のどちらの用法も持ちうる。(例 1,2)

- (1) teeta wano tan pet poro ruwe ne.
 昔 から この 川 大きい こと COP
 昔からこの川は大きい (水が多い)

(中川・中本 2004 : 41)

- (2) apto as wa nisapno pet poro ruwe ne.
 雨 降る て 急に 川 大きい こと COP
 雨が降って急に川が大きくなった (水かさが増した)

(中川・中本 2004 : 41)

知里(1973[1942])は、状態性動詞³が単独で用いられた場合、「～している」というように「現在を以て訳され得る (p504)」としている。また、非状態性動詞については、「すべて「……した」と過去を以て訳されなければならない。例えばオマン⁴は「彼行く」ではなくて「彼行った」である。(p504)」と述べている。

2.2 kor an、wa an

kor an、wa an は接続助詞 kor/wa + 存在動詞 an から構成されている。本章では先行研究の記述を概観する。2.2.1 では接続助詞 kor、2.2.2 では wa の意味を参照する。2.2.3 では、kor an、wa an が非状態性動詞と共起した場合の aspekto の意味、2.2.4 では状態性動詞と共起した場合の意味を参照する。

2.2.1 接続助詞 kor

田村(1988)によると、接続助詞 kor は「～しながら、～するとき」というように、2つ事象の同時進行を表す。また、日本語の「ながら」と違って、前後の文の主語は同じとは限らない。(例 4)

³ 知里(1973[1942])の用語では「持続態」となっている。(この場合の「態」は「アスペクト」を指すものとして用いられている。)

⁴ oman 「行く」(幌別方言)(服部編 1964 : 64)

- (3) kuni ku=ramu kor k=ek.
 そう 1SG.A=～を思う ながら 1SG.S=来る.SG
 そう (私は) 思いながら (私は) 来た

(田村すず子 1988 : 55)

- (4) horippa=as kor en=nukar.
 踊る.PL=1PL.S ながら 1SG.O=～を見る
 (私たちが) 踊っているとき (彼は私を) 見た

(田村すず子 1988 : 55)

2.2.2 接続助詞 wa

接続助詞 wa について、田村(1996)は「二つの動詞句をつないで一まとまりのことがらとしてまとめる働きをする。(p821)」と述べている。以下に田村 (1996 : 821) の記述を列挙する。

①一つのもの/ことについて二つ以上の説明や叙述をする場合にその二つの動詞句をつなぐ。

- (5) upakno oka wa sattek kusu oka wa
 同じくらいに ある.PL て 痩せる ととも～いる て
 同じくらいの大きさを痩せこけていて

②前の動詞句が後の動詞句の表す出来事の方法や意図などを説明する。

- (6) ku=hoyupu wa k=ek
 1SG.S=走る.SG て 1SG.S=来る.SG
 私は走って来た

③前の動詞句の出来事が終わってから後の動詞句の出来事が起こることを言う。

- (7) otcike huraye wa pirpa
 お膳 ～を洗う.SG て ～を拭く.PL
 お膳を洗ってふきなさい

④前の出来事が後の出来事の原因か理由になっている。

- (8) k=ukao oyra wa rurikan
 1SG.A=～をしまう ～を忘れる て 少し湿る

私は（洗濯物を）しまい忘れて少し湿った

また、佐藤(2008)は wa の機能について、以下のように説明している。

wa は日本語の「～て」に概ね対応するが、目立つ違いもある。「お椀を私が落として割った。」は正しい日本語であるが、「お椀を私が落として割れた。」は少しおかしい。すなわち、日本語の「～て」は、省略されている主節の主語が「～て」節の中の主語「私が」と同一であることを要求する。アイヌ語の wa にはそのような制約がないようである。

itanki k=opici wa perke. 「(直訳) お椀を私が落として割れた。」
お椀 1SG.A=落とす て 割れる

なお、wa は付帯状況を示すことがあるが、全くの同時進行というよりはむしろ、ある程度の前後関係を含意する場合が多いようである。

(佐藤 2008 : 45-46、グロス は 筆者による)

2.2.3 非状態性動詞と kor an、wa an

非状態性動詞と kor an、wa an が共起した場合、動詞の限界性によって意味に差異が生まれる (cf. 中川 1981)。非限界動詞は kor an と共起して<動作継続>を表す (例 9) が、wa an とは共起できない (例 10)。限界動詞の場合、kor an と共起すると<変化の進行の過程>を表し (例 11)、wa an と共起すると<変化の結果継続>を表す。(例 12)

- (9) apkas kor an.
歩く て いる.SG
歩いている<動作継続>

(cf. 中川 1981 : 135)

- (10) * apkas wa an
歩く て いる.SG

(cf. 中川 1981 : 136)

- (11) hacir kor an.
落ちる て いる.SG
落ちている (今、落ちている最中だ) <変化の進行の過程>

- (12) hacir wa an.
 落ちる て いる.SG
 落ちている (落ちて、地面の上にある) <変化の結果継続>

(中川・中本 2004 : 81)

アイヌ語の動詞には人称変化があるが、kor an、wa an 構文では、両形式の前部にある動詞のほか、動詞 an にも人称⁵が表示される。

kor an の人称は、kor an の付く動詞の人称と一致する場合 (例 13) もあれば、しない場合 (例 14, 15) もある。

- (13) k=apkas kor k=an.
 1SG.S=歩く て 1SG.S=いる.SG
 私は歩いている (作例)

- (14) ene eci=yavnupa kor oka hi
 こう 2PL.S=思う て いる.PL こと
 a=nukar kor an=an.
 4.A=～を見る て いる.SG=4.S
 お前達がどう思っているかを人が見ている

(佐藤 2006 : 54)

- (15) earkinne k=eyaykopuntek kor
 とても 1SG.A=～を喜ぶ て
 aynu itak ani uenevsar kor k=an
 アイヌ語 で いろいろ語り合う て 1SG.S=いる.SG
 私はたいへんうれしく思いながら、アイヌ語でおしゃべりをしています

(上田・ウ : 1)

⁵ これまでに挙げた例文はすべて三人称であり、三人称の場合は人称接辞はゼロ表示となるが、それ以外の一人称、二人称、四人称は有標である。四人称は、包括的一人称複数、二人称敬称、不定人称、物語中の叙述者の人称等の用法を持つ。

wa an の場合、最初の動詞が自動詞ならば、人称は一致する（例 16）。他動詞の場合は、一致するもの（例 17）と一致しないもの（例 18）がある。（17）は hok 「買う」と an 「いる」の人称が一致（どちらも一人称）していることから＜主体の状態の変化＞を表し、（18）は an の人称がゼロ（＝三人称＝「酒」）であることから、＜対象の状態・位置の変化＞を表している。（中川 1981）

- (16) tap ku=siyeye wa k=an.
 今 1SG.S=病気になる て 1SG=いる.SG
 今、私は体の具合が悪い（病気になっている）
- （中川 1981 : 132）

- (17) sake ku=hok wa k=an na
 酒 1SG.A=～を買う て 1SG.S=いる.SG から
 en=kosinewe yan.
 1SG.O=遊びに来る IMP.POL
 お酒が買ってありますから家へ遊びに来て下さい
- （中川 1981 : 133）

- (18) tonoto ku=hok wa an na en=kosinewe.
 酒 1SG.A=～を買う て ある.SG から 1SG.O=遊びに来る
 お酒が買ってありますから家へ遊びに来て下さい
- （中川 1981 : 133）

先行研究にもとづき、沙流方言、千歳方言における kor an と wa an の意味区分をまとめると次の表 1 のようになる。ただし、kor an、wa an は必ずしも完全な対立をなすものではなく、使い分けは話者判断に依るところがあるようである（cf. 中川 1981）。

| | | kor an | wa an |
|--------|-------|----------------------|-----------------------|
| 非状態性動詞 | 非限界動詞 | ～している＜動作継続＞ | × |
| | 限界動詞 | ～しつつある ＜変化の進行の過程＞ | ～している／ある ＜変化の結果継続＞ |

表 1

2.2.4 状態性動詞と kor an、wa an

状態性動詞と kor an、wa an との共起については、それぞれ用例の紹介はあるものの、アスペクトと言う観点からの分析については未だまとまった記述がない。

状態性動詞に kor an が付くと<変化の進行の過程>をあらわすようだが(例 19)、wa an が付いた場合はアスペクト的意味にバリエーションが生じる。(20)と(21)はどちらも poro 「大きくなる」に wa an が後続しているが、(20)は poro wa an 全体で「大きくなった=成長した」という変化をあらわしており、wa an がない場合との対立が不明瞭である。(21)は沢に沿って下っていくとだんだんと沢が大きくなっていっているという単なる状態をあらわしており、日本語の「道が曲がっている」のようなテイルに近い。

- (19) pet poro kor an.
 川 大きい て ある.SG
 川が増水している

(佐藤 2007 : 44)

- (20) nen poka poro wa an ruwe ne p
 なんとかして 大きい て ある.SG こと COP が
 どうにかこうにか大きくなった (成長した) のですが

(ア音 2 : 42)

- (21) DANDANNI nay poro wa an nankor kusu
 だんだんに 沢 大きい て いる.SG だろう から
 だんだん沢が大きくなっているだろうから

(千葉 1 : 499)

(22)も wa an が付かない場合でも同じ文意になる。単なる状態を表し、(20)のように変化を表しているわけでもない。

- (22) aynu opitta honihi kor wa okay pe ne wa.
 人間 皆 腹 ~を持つ て いる.PL もの COP FIN
 ‘Human beings all have a belly.’

(Sato1997 : 150)

また、wa an が<一時性>をあらわす場合もある。存在動詞 an と wa an が共起するもの（例 23）について、佐藤(2007)は wa an が存在動詞のような本来恒常的な状態を表す動詞と共に用いられた場合、「一時的な状態」を表すのであり、an wa an は「存在」といっても、「たまたま一時的にそこにいた／あった」という意味を表している（p48）」としている。佐藤(2007)は、「an wa an」の最初の an を「出現する」という意味でとらえて、「出現している」という変化の結果の継続として解釈する考え方もあり得るとしているが、一方で、「an が単独で出現の意味で用いられる例が容易に見つからないことを考えると、傍証がない限り即座には従いがたい（同 p51）」とも述べている。

(23) ku=nimu akusu rik ta
 1SG.S=木に登る すると 高所 に
 kinasutunkur an wa an.
 ヘビ ある.SG て いる.SG
 私が木に登ったら上にヘビがいた

(佐藤 2007 : 47)

cf. (24) ku=konimu cikuni ka ta kinasutunkur an.
 1SG.A=～に登る 木 上 に ヘビ いる.SG
 私が登った木の上にヘビがいた

(佐藤 2007 : 47)

このほか、田村(1988)などによると、習慣を表すときに kor an が用いられることがある。(25)は近年の習慣を表しているという。

(25) nen ne yakka sapaha kunnere kor oka.
 誰 COP ても 頭 黒く染める て いる.PL
 だれでも頭を黒くそめている

(田村 1988 : 55)

3. kor an、wa an の意味範疇

2章で見たように、非状態性動詞の場合、kor an<動作継続>または<変化進行>、wa an<変化の進行の過程>または<変化の結果継続>という対立がある。これは、日本語の西日本諸方言にあるシヨルとシトルの対立⁶ (cf. 工藤 2014 など) とも類似しているが、アイヌ語の場合は kor an、wa an で表される事態は、日本語のそれとは時間的な面でも空間的な面でも異なっている。本章では kor an、wa an の表す意味範疇について、その両面から考察する。

3.1 事態の直前、開始段階—kor an について

工藤(2014 : 645)によると、「戸が開きヨル」と言った場合、戸が開きつつあるのを見ている状況の場合もあれば、風で戸ががたがた音をたてている状況の場合もある。前者は変化の進行（事態の内部段階）を捉えているが、後者は「戸が開きそうだ」という戸が開く事態の直前の段階を捉えている。こうしたシヨル形式と比較した場合、kor an は前者は表すが、後者は表すことはできない。⁷

また、事態の開始段階について言えば、アイヌ語には「～しはじめる」という意味を表すアスペクト形式があるかどうかは定かではない。「～を始める」という意味の動詞 oasi はあるものの、これが助動詞として機能した場合でも事態の開始は示さない。中川(1982)は助動詞 oasi について、「<ある事象が将来確実に起こると予想される>ことを表わす (p243)」形式であり、「これまで、基本的にアスペクトを表すものとして扱われていましたが、実際にはムードを表わすのが基本的用法 (pp.242-243)」であると述べている。

(26) nisatta k=arpa oasi ruwe ne.
 明日 1SG.A=行く.SG はじめる こと COP
 (行くことになった、行くことに決まっている、という意味)

(中川 1982 : 243)

また中川(1982)は、「～しはじめる」という意味を表しうる形式としては幌別方言などの heasi があるということを述べつつも、該当する実例はないとしている。heasi の用例についてはまだ調査段階

⁶ シヨル・シトルの意味のバリエーションは各方言によって様々であるが、今回詳細は割愛する。
⁷ 金田一 (1993 [1931] : 347) には「打とうとする」という意味で「kik kusu ne kor an」(kik「～を打つ」、接続助詞 kusu「～するために」、ne「である」、+kor an) という例が挙げられているが、kusu ne は通常「～するつもりである」という文末詞として現れる形式であり、kor an が後続した例は少なくとも沙流・千歳方言では見当たらない。さらに、この場合「打とうとする」という動作の直前段階の意味は kusu ne が担っているものであり、kor an が担っているものではないと考える。

であるが、heasi は沙流、千歳方言の語彙ではないため、少なくとも沙流、千歳方言では事態の開始を表す文法的形式はないと考えられる。

3.2 事態の終結、直後の段階—wa an について

wa an は、変化の直接的結果の継続を表すことはできるが、間接的結果を表すことはできない。つまり、wa an は<動作パーフェクト>を表せない。(佐藤 2006)

例えば、日本語の標準語のテイルは「豆の様子じゃ、10 里くらい歩いているよ (工藤 1995 : 121)」のような表現が可能であり、方言のシトル形式でも客体結果を表す意味で「太郎が 戸 開けとる」(実際の動作は見えていないが、戸が開いていることから判断) と言うことができるが、アイヌ語の wa an にはこうした用法が無い。たとえば(10)のように言うことができず、中川(1981)によれば、(10)について話者は「歩くのではなくて、立っているみたいだ」という見解を示したという。

(10 再掲) * apkas wa an
 歩く て いる.SG

(中川 1981 : 136)

動作が終わったあとの段階を表す際には、(27)の wa isam や(28)の wa okere という形式が使われる。wa isam、wa okere は、接続助詞 wa + 自動詞 isam 「ない、なくなる」、接続助詞 wa + 他動詞 okere 「～を終える」という構成であり、どちらも「～てしまう」と訳されることが多いが、前者は「行動の結果、何かがなくなってしまったこと (田村 1988 : 43)」を表し、後者は「予定の行動がすんだこと (p43)」を表すという違いがある。

(27) ku=ku wa isam
 1SG.A=～を飲む て 無い
 飲んでしまった
 =全部飲んでしまって、からっぽにした (だからお茶碗の中に水がない)

(田村 1988 : 43)

(28) ku=ku wa okere
 1SG.A=～を飲む て ～し終える
 飲んでしまった=飲むはずになっていたのを飲み終えた

(田村 1988 : 43)

wa okere を kor an や wa an と同じくアスペクト形式とする見方もあるが、意味的、文法的な観点からすると、同じレベルでは扱い難い。

意味的な点で言えば、wa okere は、状態性動詞に付くと、その程度のはなはだしいことを指す形式となる。たとえば pirka 「よい、美しい」であれば、pirka wa okere 「それはそれはきれいな、最高に美しい。(田村 1996 : 462)」という意味になる。つまり、wa okere は「～し終える」というよりむしろ「～しきる」に近いものであると考えることができる。須田(2010)は「しきる」について、「対象への働きかけが、あますところなく、徹底的であるということを表し、動作の過程全体の実現のし方を表していると言える。動作の結果との関係において動作の実現のし方表しているので、動作が終わったということを表すともいえるのだが、動作の始まりや続きとの関係において、終わりを表しているわけではない。(p176)」としている。

また、wa okere は接続助詞 wa を伴わずに okere 単独で助動詞としてはたらくこともできる。つまり、(28)であれば、ku=ku okere と言っても同じことになるし、程度のはなはだしさを表す場合も okere のみになることがある。

このような事情も含め、3.1 および 3.2 から、kor an、wa an はあくまでも事態の過程のみを表す形式であり、その周辺の時間的局面は oasi や okere が担うものと考えられる。しかし、oasi や okere はアスペクトというよりもモーダルな領域に属するものと考えられる。

3.3 存在の有無

wa an が間接的な結果を表さないことは存在動詞 an と自動詞 isam 「ない、なくなる」との対立からも見てとれる。例えば (29) のように、「ray wa an」は目の前で死んでいる（目の前に死体がある）ことを表し、今死体がない場合には(30)のように wa isam を使う。(30)は船に乗って出かけて行った和人が、息も絶え絶えで帰り、「一緒に船に乗っていた足軽たちは皆死んで、一人で生き残って帰ってきた」という事情を、相手のアイヌに説明している場面である。

| | | | | | | | |
|------|-------|--------|------------|-----------|-----------|-----|---------|
| (29) | uni | ta | ahup=an | akus | | | |
| | 家 | に | 入る.PL=4.S | すると | | | |
| | ne | hokuhu | ne | aan | pe | ape | ekohopi |
| | その | 夫 | COP | だった | もの | 火 | ～からわかれて |
| | hokus | hine | <u>ray</u> | <u>wa</u> | <u>an</u> | | |
| | 倒れる | て | 死ぬ | て | いる.SG | | |

(私たちが) 家に入ると、夫であった人は囲炉裏に背を向けて倒れて死んでいました

(30) nea a=tura asinkaro utar ka

あの 4.A=～を連れる 足軽 たち も

opitta ray wa isam

皆 死ぬ て ない

一緒に船に乗っていた足軽たちはみんな死んでしまったのです (=死体はない)

(萱野 1998 : 84)

今のところ、ray wa an が用いられているのに死体がないという用例は見当たらず、また、死体が目の前にあるという状況で ray wa isam が用いられている例も見当たらない。⁸

3.2 の冒頭で述べたように、wa an は<動作パーフェクト>を示さない(佐藤 2006)ので、(30)の状況では ray wa an は使用できない(例 31)ということになる。

(31) *a=tura asinkaro utar ka

4.A=～を連れる 足軽 たち も

opitta ray wa an

皆 死ぬ て いる.SG

一緒に船に乗っていた足軽たちは(もう)みんな死んでいる(例 30 からの作例)

cf. 「足利の叔父は昨年死亡しております。」(工藤 2014 : 222)

このことから、wa an の使用基準の一つとして具体的な存在の有無が挙げられる。つまり、発話時において、話し手が認識している空間に主体がない場合は wa an は使用できない。これは、日本

⁸ 1 例、韻文(メノユカラ)の中で、実際に目の前に死体があるにもかかわらず isam が使われている例があった。以下は、「私」が鍋に入れて火にかけて殺した狐を、鍋から出すところの場面である。しかし、韻文では文法規則よりも 1 行の音節数を合わせる事が優先されることがしばしばある。1 行の音節数は 5 音節を基本として 4~7 音節に揃えられ(田村 1987 : 9、丹菊 2018 : 25 など)、「ray・wa・an・hi (4 音節)」でも問題はないのだが、より基本の 5 音節に揃えるために isam を選び 5 音節 (ray・wa・i・sam・hi) とした可能性もある。

ray wa isam hi / a=erawan wa / poro su / a=yanke wa
 死ぬ て ない こと 4.A=～がわかる て 大きな 鍋 4.A=～を下ろす て
 (狐が) 死んでしまったことを / (私は) わかったから / 大きな鍋を / (私は火から) 下ろして
 (大谷 1995 : 46-47)

語のテイル (テアル) のイル (アル) が文法化しているのに対し、アイヌ語の *an* の場合は人称標示を要求⁹し、存在の意味が保持されていることとも関係する。*wa an* の *an* の人称が動作主の人称と一致する場合は必然的に動作主の存在が前提となっている。また、*kor an* は運動の限界達成前の段階をとらえる形式であるため、これも動作主の存在が必然的である。

そして、佐藤 (2008 : 200) によれば「～ないでいる」という否定表現は *kor an*、*wa an* ではなく *somo ki no an* という形式で表されるが、これも *kor an*、*wa an* が具体的な存在を要求することと矛盾しない (例 32, 33)。

(32) na ku=ipe ka somo ki no k=an
 まだ 1SG.S=食事する も NEG する で 1SG.S=いる.SG
 私はまだ食べずにいる (=私はまだ食べていない)
(佐藤 2008 : 200)

(33) hokus ka somo ki no an pe
 ひっくり返る も NEG する で いる.SG もの
 ひっくり返らずにいるもの (=ひっくり返っていないもの)

cf. hokus wa an
 ひっくり返る て いる.SG

(佐藤 2008 : 200)

このようなことから、*kor an*、*wa an* は事態の内的時間にかかわる形式であると同時に、事態の在り方にかかわる形式であるといえる。一般にアスペクトとは、「事態の内部的な時間構造の捉え方 (事態の開始・持続・終結のどの段階に注目するかなど) に関わる文法カテゴリー (斎藤ほか 2015 : 4)」であるが、むしろ *an* と *isam* との対立から考えれば、時間認識よりも空間認識のほうが先立っているともいえる。

岡(2013)は日本語のテイル形式に関して、「従来アスペクト形式としてとらえられてきたテイル形式を、事態の存在化形式として一次的に規定 (p20)」している。そして、「アスペクトを状況の在り方=存在様相を述定する仕方」として、すなわち、実現した事態が「今、ここで、私において」表

⁹ 十勝方言など、この制約がない方言もある。

れたものとして把握する仕方である (p20)」と捉えている。アイヌ語のアスペクトを考えるうえで、存在様相を述定する仕方を考えることは有用であると思われる。

3.4 テンスとの相関

テンスとの相関から言えば、日本語の「テイル」は未来・現在における継続性をあらわし、「テイタ」は過去における継続性を表す (cf. 工藤 2014)。これに対しアイヌ語の *kor an*、*wa an* は、未来時制にはかかわらず、現在および過去における継続性をあらわしうる。しかし、3.1、3.2、3.3 で見たように、*kor an* も *wa an* も出来事時点において直接的な運動、あるいはその運動の直接的結果がなければ使用できないことを考えれば、現在とのかかわりがより密接なのではないかと考えられる。

アイヌ語は文法的テンスを持たず、事態がいつのことなのかは時間副詞や文脈によって区別される。「動詞 *kor an* / *wa an*」も、(34)(35)のように副詞句などを以て外的に時間が限定されている場合は過去における継続性をあらわすが、そのような要素がなく「動詞 *kor an* / *wa an*」単独であらわれた場合は現在の状況をあらわす用例が大半である。

- (34) *esir* *pakno* *huci* *hemanta* *kar* *kor* *an* ?
 さっき まで おばあさん 何 ～をする て いる.SG
 さっきまでおばあさん何をしていた？

(佐藤 2008 : 186)

- (35) *tap uhunak* *pakno* *MISA huci* *yaveranak* *wa* *an*
 ついこの頃 まで ミサ おばあさん 病気する て いる.SG
 korka *onne* *wa* *isam.*
 けれど 老いて死ぬ て 無い
 ついこの頃までみさばあさんが病気していたが、亡くなった

(萱野 1996 : 296)

金田一 (1993 [1931] : 347-348)、知里 (1973[1942] : 504) によれば、非状態性動詞が単独であらわれた場合は、「～スル」ではなく、常に「～シタ」という「過去形」で訳されるという。非状態性動詞が単独で「過去」をあらわすならば、非過去をあらわすためには何らかの文法的形式が付加されなければならない。そこで、*kor an*、*wa an* が現在の標識としても機能しているのではないかと推測される。

一方、状態性動詞の場合、2.2.4 でみたように、wa an には<一時性>をあらわす用法がある。

(23 再掲) ku=nimu akusu rik ta
1SG.S=木に登る すると 高所 に
kinasutunkur an wa an.
へび ある.SG て いる.SG
私が木に登ったら上にへびがいた

(佐藤 2007 : 47)

これと類似の現象が日本語の方言にもある。工藤(2014 : 481)によると、熊本県松橋方言では存在動詞、形容詞にシヨル形式が後続し、一時性が表される。(以下に引用した例はすべて現在時制のものであり、過去時制の場合は「～ヨッタ」となる。)

- ・鳥居ノ前 ゴミン アリヨル。 <一時性・現在>
- ・コノ部屋 寒カリヨル。 <一時性・現在>
- ・花子ン顔 白カリヨル。 <一時性・現在>

(工藤 2014 : 544,545 より抜粋)

工藤(2014)は<一時性>の意味があらわれることについて、「運動動詞は、<時間限界のある動的事象>をあらわすがゆえに、<進行(終了前の段階)>かく結果(終了後の段階)>というかたちで、時間的限定性のある一時的な動的事象を表すことになる。一方、存在動詞、形容詞、名詞述語の場合には、開始限界、進展過程、終了限界、結果といった時間的展開性がない。従って、<一時性>という意味が直接的に顔を出すことになる。(p549)」と述べている。

アイヌ語の場合、kor an / wa an によって「時間的限定性のある一時的な動的事象」があらわされ、<一時性>が無標の非状態性動詞とのテンス的な対立につながる一方、状態性動詞においては、非限界性を捉えた場合は<一時性>、限界性を捉えた場合は(20)のように<変化の結果継続>となるのだと考えられる。

(20 再掲) nen poka poro wa an ruwe ne p
なんとかして 大きい て ある.SG こと COP が
どうにかこうにか大きくなった (成長した) のですが

kor an の習慣的用法についても、現在における一時的な現象とみることができる。(例 25)

(25 再掲) nen ne yakka sapaha kunnere kor oka.

誰 COP ても 頭 黒く染める て いる.PL

だれでも頭を黒くそめている

(田村 1988 : 55)

状態性動詞に wa an が後続して<恒常性>をあらわす用例に関しては、脱アスペクト化した形式であり、一時性とも関連しない。(21)は道に沿って沢が大きくなっているという単なる状態に近いものである。(22)のような例になると、wa an のアスペクト性は完全に失われ、動詞単独で用いられた場合と中和している。

(21 再掲) DANDANNI nay poro wa an nankor kusu

だんだんに 沢 大きい て いる.SG だろう から

だんだん沢が大きくなっているだろうから

(千葉 1 : 499)

(22 再掲) aynu opitta honihi kor wa okay pe ne wa.

人間 皆 腹 ~を持つ て いる.PL もの COP FIN

‘Human beings all have a belly.’

(Sato1997 : 150)

同様の wa an の用法は十勝方言でも報告されている。(36)は、「retar cieywankep」と言うほうが普通であり、これが wa an を伴ったものと意味的な差異があるかどうかは不明である。

(36) retar wa an cieywankep

白い て ある.SG 使われるもの

白色の使われる物 (白いカーテン)

(高橋 2004 : 95)

状態性動詞に **kor an**、**wa an** が後続した場合の意味について、表 1（非状態性動詞のもの）に付加する形で以下の表 2 にまとめた。

| | | kor an | wa an |
|--------|--------|----------------------------|-----------------------|
| 非状態性動詞 | 非限界動詞 | ～している<動作継続> | × |
| | 限界動詞 | ～しつつある <変化の進行の過程> | ～している／ある <変化の結果継続> |
| 状態性動詞 | 非限界的用法 | × | <一時性> <恒常性>（中和） |
| | 限界的用法 | ～している／～しつつある <変化の進行の過程> | ～になっている <変化の結果継続> |
| | | 反復＝<一時性> ¹⁰ | |

表 2（表 1 を拡張したもの）

4. まとめ

以上、アイヌ語沙流方言および千歳方言における **kor an** と **wa an** の意味範疇を考察した。当該形式は、事態の内的時間構造という時間的側面だけでなく、存在・非存在という空間的な側面が問題とされる形式である。

当該形式によって、時間的限定性のある一時的な事象があらわされるわけだが、非状態性動詞と共起した場合、その<一時性>が無標の非状態性動詞とのテンス的な対立につながり、結果的に現在時制との結びつきが強くなる。一方、状態性動詞と共起した場合、非限界性を捉えた場合は<一時性>、限界性を捉えた場合は<変化の結果継続>の意味があらわされる。

本稿での未解決部分や、**kane an**、**hine an**、また、他方言の存在型アスペクト形式については今後稿を改めて述べたい。

¹⁰ **kor an** のいわゆる習慣用法については例が少なく、共起する動詞の性質に制約があるかどうか定かではないため、表 2 のなかでは暫定的にこの配置とした。(25)の **kunnere**「黒く染める」が変化動詞だとすると、「変化動詞+**kor an**」で通常<変化の進行の過程>となるところが、習慣的な意味になる、という現象が起きていることになるが、他にも同様のものがあるかどうかは不明なため、今後の課題としたい。なお、知里真志保(1973[1942])には、「習慣的事実」として以下の例が挙げられているが、「動作動詞+**kor an**」という<動作継続>の一種としても捉えることができる。

「monrayke wa ipe kor an、働いて食っている。」(p572)
 働く て 食べる て いる

◆略号

1, 2, 4 : 人称 (3 人称はゼロ) , = : 人称接辞境界, S : 自動詞主語, A : 他動詞主語, O : 目的語,
SG : 単数, PL : 複数, COP : コピュラ動詞, NEG : 否定, IMP.POL : 命令・丁寧, FIN : 終助詞

◆参考文献・資料 (資料記号を付したものは、文献名末尾【】内に記した。)

アイヌ民族博物館編(1997)『上田トシのウエペケレ』アイヌ民族博物館。【上田・ウ】

大谷洋一(1995)「松島トミの伝承」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』1, pp.27-50,
北海道立アイヌ民族文化研究センター。

岡智之(2001)「テイル (テアル) 構文の認知言語学的分析～存在論的観点に基づくアスペクト論の
展開～」『日本認知言語学会論文集』1, pp.132-142.

———(2013)「第1章 日本語存在表現の文文化」「第2章 テンス・アスペクトの文文化と類型
論, 山梨正明ほか編『認知歴史言語学』pp.3-75, くろしお出版。

萱野茂(1996)『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂。

———(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成』6, 平凡社。

金水敏(2006)『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房。

金田一京助 (1993 [1931])「アイヌ語学講義」『金田一京助全集 アイヌ語 I』5, pp.133-366, 三省堂。

工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房。

———(2014)『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房。

斎藤純男・田口善久・西村義樹編(2015)『明解言語学辞典』三省堂。

佐藤知己(2006)「アイヌ語十歳方言のアスペクト—kor an、wa an を中心に」『北海道立アイヌ民族
文化研究センター研究紀要』12, pp.43-67, 北海道立アイヌ民族文化研究センター

———(2007)「アイヌ語のアスペクトと日本語のアスペクトの対照」『日本語学』26(3), pp.44-
52, 明治書院。

———(2008)『アイヌ語文法の基礎』大学書林。

須田義治(2010)『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房。

高橋靖以(2004)「アイヌ語十勝方言の助詞」北海道大学大学院文学研究科博士論文。

田村すず子(1985)『アイヌ語音声資料』2, 早稲田大学語学教育研究所。【ア音 2】

———(1988)「アイヌ語」亀井孝・河野一郎・千野栄一編『言語学大辞典』1, 三省堂。

———(1996)『アイヌ語沙流方言辞典』草風館。

丹菊逸治(2018)『アイヌ叙景詩鑑賞：押韻法を中心に』北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

千葉大学編(2015)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次
(北海道沙流郡平取町) 調査研究報告書 1 / 3』千葉大学。【千葉 1】

- (2015)『アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業 第2年次
(北海道沙流郡平取町) 調査研究報告書 3/3』千葉大学.【千葉3】
- 知里真志保(1973[1942])「アイヌ語法研究」『知里真志保著作集』3, pp.457-586, 平凡社.
- 中川裕(1981)「アスペクト的観点から見たアイヌ語の動詞」『言語学演習 '81』, pp.131-141, 東京大学文学部言語学研究室.
- (1982)「助動詞としてのオアシの用法」『アイヌ文化』7, pp.240-246, アイヌ無形文化伝承保存会.
- 中川裕・中本ムツ子(2004)『CD エクスプレス アイヌ語』白水社.
- 服部四郎編(1964)『アイヌ語方言辞典』岩波書店.
- Sato Tomomi (1997) 'Possessive expressions in Ainu', in Hayashi Tōru & Bhaskararao, Peri (eds.) *Studies in Possessive Expressions*, pp. 143-160, Tokyo University of Foreign Studies.

(よしかわ よしみ・千葉大学人文社会科学研究所、国立国語研究所非常勤研究員)

On the Semantic Category of Existential Aspect Forms “*kor an*” and “*wa an*” in Ainu

YOSHIKAWA Yoshimi

Summary :

In this paper, I analyze the semantic category of existential aspect forms “*kor an*” and “*wa an*” in Ainu. It will be pointed out that these aspect forms are associated with not only the temporal factor but also the spatial factor, especially the existence or non-existence in a given space.

Furthermore, taking into consideration that these forms express a temporary state, I suggest that “*kor an*” and “*wa an*” can function as present tense markers.